

『プロイセン国王フリードリヒ2世遺作集』 全15巻 (1788)

Hinterlassene Werke Friedrichs II. Königs von Preussen,
15 Bde., Berlin 1788

佐藤 真一(前図書館長・歴史)



オーストリア継承戦争と七年戦争を戦いぬぎ、プロイセンをヨーロッパの強国の地位に引き上げ、また啓蒙主義的な内政改革を遂行したフリードリヒ2世 (1712-86、在位、1740-86)。このプロイセン王は少年時代にクヴァンツからフルートの手ほどきを受け、後にフルートソナタを数多く作曲したことで知られる。「大王」と呼ばれる

にふさわしい君主としての力量とならんで、フリードリヒが示したこうした柔らかな感受性はフランス文化に対する敬意となり、学芸への愛情はフランス語による数多くの著作として実を結ぶことになる。この著作集はフリードリヒの同時代の歴史と現状を記述した主著と論考、書簡のドイツ語訳で、18世紀後半のヨーロッパを知る貴重な史料である。

各巻の構成は、第1-2巻は『わが時代の歴史』、第3-4巻は『七年戦争の歴史』。第5巻は『1763年のフベルトゥスブルクの和約から1775年のポーランド分割の決着までの回想録』、バイエルンの相続に関する皇帝夫妻との往復書簡。第6巻は『ヨーロッパ諸国家体制の現状に関する考察』をはじめとする諸論考、詩その他。第7-8巻はヨルダン、ヴォルテールをはじめ多くの人びとへの書簡、詩、寓話、アレゴリー、など。第9巻はヴォルテールとの往復書簡。第10巻はヴォルテール、シャトレ公爵夫人、ダルジャン公爵への書簡、第11巻はダランベールへの書簡。第12-13巻はダランベールその他の人々への書簡、ヨルダン、シャトレ公爵夫人、とりわけダルジャン公爵からフリードリヒへの書簡。第14-15巻は、おもにダランベールからフリードリヒへの書簡である。

1740年5月末の父王フリードリヒ・ヴィルヘルム1世の死去に伴ってフリードリヒはプロイセン王となった。同年10月20日、皇帝カール6世の死により、マリア・テレジアが即位する。これに異議を唱えるバイエルンなどの介入によって紛糾する中で、フリードリヒはマリア・テレジアの相続を認める代わりにシュレージエンの領有を主張して、同地を不法に占拠した。これをきっかけにオーストリア継承戦争が勃発する(シュレージエン領有は、七年戦争を終結させたフベルトゥスブルクの和約によって最終的に確定する)。こうした1740年以後の時代の戦争とヨーロッパ国際関係を克明につづった時代考察がその内容となる。時代のうねりの只中にいた君主自身の記述だけに精彩に富む証言となっている。

また、18世紀を代表するヴォルテールやダランベールとの交流も注目される。とくにヴォルテールとは1736年以来文通を続け、この文人は1750年から2年半あまり王の助言者としてサンスーシ宮殿で過ごす。フリードリヒにとってヴォルテールは「世紀の唯一の大天才」であった。これらの往復書簡は、こうした知的交流を鮮やかに浮き彫りにしている。